

調査・研究紹介

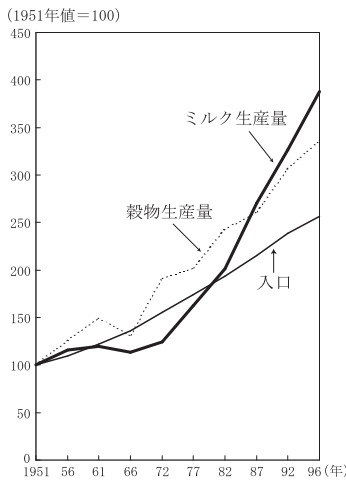
インドの酪農協同組合

一、はじめに

宗教的な理由から肉食を避ける菜食主義者が多いインドでは、昔からミルクは、豆類とともに、極めて貴重なタンパク源であった。また、経済的豊かさの実現とともに需要が急速に伸びるという意味で、現在そしてこれからのインドにとって、非常に重要な農産物である。

FAOの予測によれば、一九九八-一九九九年度にインドはアメリカ合衆国を抜いて世界第一位のミルク生産国になる。かつて大量のミルクを輸入に頼っていたインドは、近年の急速な増産によってミルクの自給を達成しただけでなく、世界市場に向けて輸出をねらうほどに成長している。図が示すように、一九七〇年代に入ってからインドのミ

図 インドのミルク生産量の伸び



ルク(水牛乳・牛乳・山羊乳)生産は急速に増大し、その伸びは人口や穀物生産の伸びを大きく上回っている。

このミルク生産の伸びと重なり合うように成長してきたのが、アナンド型酪農協と呼ばれる酪農協同組合系統組織である。ここでは、この酪農協の現状と課題を簡単に整理していきたい。

二、アナンド型酪農協

(一) 始まりと成長

インドの酪農協の歴史は一九一三年にまで遡るが、現在主流となっているアナンド型酪農協の始まりは、イギリスからインドが独立する直前の一九四六年である。大都市ボンベイ(ムンバイ)の比較的近郊に位置する現グジャラート州のアナンドは、以前からボンベイのミルク供給地であったが、酪農家達は、商人の専横に抗し、一九四六年に自分たちで酪農協をつくってミルク処理工場を持ち、販売をはじめたのである。

イギリスからの独立後、六四年に、当時の首相ジャストリがこの酪農協をみて感激した。そして、早速翌年に設立された全国酪農開発局(NDDB)を拠点として、政府の肝いりで酪農協をインド各地に普及することになった。

こうした政府の動きを資金的に強く後押ししたのが、FAOやEUの援助である。一九七〇年にFAOの資金を得て、「オペレーション・フラッド(洪水作戦)」と名づけられた酪農協普及計画が開始された。これは、ヨーロッパ経済共同体や世銀から資金を得た第二次、第三次オペレーション・フラッドに引き継がれ、アナンド型酪農協をインド各地で普及していった。現在一九九七年三月、全国でアナンド型酪農協は七・四万組合員は九六一人まで成長している(表)。

(二) アナンド型酪農協の組織

アナンド型酪農協は、政府機関である全国酪農開発局(NDDB)を除けば、村落レベルの単協、県レベルの連合会、州レベ

表 アナンド型酪農協の現状

	酪農協数 (組合)	酪農協 組合員数 (万人)	ミルク年間 集荷量 (万トン)	ミルク年間 総生産量 (万トン)	酪農協 集荷率 (%)	(参考) ミルク生産 増加率 (%)
北部地区	24,693	148	74	2,295	3.2	113
東部地区	5,470	31	15	722	2.1	164
西部地区	22,014	338	227	1,199	18.9	189
うち、グジャラート州	11,900	202	142	353	40.2	97
南部地区	22,171	444	132	1,049	12.6	238
全国	74,348	961	448	5,265	8.5	154

出所：NDDB、Annual Report 1996-97。ほか、筆者の推計を含む。  
注：ミルク生産量と酪農協集荷率は1990-91年度、酪農協ミルク集荷量、酪農協数、酪農協組合員数は、1996-97年度の値。ミルク生産増加率は、1971-72年度から90-91年度の間の生産量増加率。

ルの連合会の三段階の組織構造を持つ。

単協は、平均一三〇人ほどの組合員からなり、村落レベルに組織されて、ミルク・水牛乳や牛乳)の集荷、一時保存、県連合会への販売を行うことを主な活動としている。また、組合員への濃厚飼料の販売、人工授精・獣医サービスなども行う。信用事業は行わない。

県連合会は、ミルクの処理と加工のための近代的工場を持ち、単協から集荷されたミルクを処理して生乳として販売する一方、余ったミルクをバター、脱脂粉乳などに加工する。ミルクの増産に不可欠な濃厚飼料を生産する工場も持つており、アナンド型酪農協の実質的な地方拠点といえよう。

州連合会は、県連合会からなり、その発展や州を超えたミルク・酪農加工品の販売促進を目的としている。

### 三、酪農協の成果と課題

#### (一) 成果

まず第一に挙げられるのが、酪農協が村落レベルで設立されたことにより、安定したミルク販売ルートが形成され、獣医サービスや濃厚飼料供給などのサービスがなされたことである。これによつて、乳牛や水牛を一頭、二頭と飼つ小規模な酪農家の所得増加に貢献したと考えられる。藁やふすま、米ぬかなど作物残滓や共同放牧場などを家畜の主な飼料源としている現在のインドでは、ミルクはまだ貴重品で、小規模な酪農家にとつて、ミルク生産は大きな所得源となつていのである。

また、こうした小規模の生産農家が持ち

込む一リットル、二リットルという少量のミルクを村落レベルで集め、県レベルの近代的工場で処理して線路網を使って数千キロ離れた大都市まで運ぶ流通網を作りあげたことである。これは、人口が急増し、経済発展とともに増大する大都市のミルク需要に応えるためにも大きな貢献であつたといえる。

#### (二) 課題

インドの農協を代表する酪農協だが、その課題も少なくない。その一つは、生産増大への貢献である。ここで掲げた表で見ると、地区別で見た場合、酪農協の影響度(酪農協のミルク集荷率)が高い西部と南部地区では、ミルク集荷率が低い北部と東部よりも、過去二〇年間のミルク生産増加率が高い。また、図で分かるように、インドのミルク生産が急増し始めた一九七〇年頃は、酪農協を普及するオペレーション・フラッドの開始時期と一致している。これらは、酪農協がミルク生産増大の大きな要因となつた可能性を示唆するが、州レベルで見るとこの関係は必ずしも明確とは言えない。特に、酪農協が最も活発なグジャラート州では、ミルク生産の増加率は全国平均よりかなり低いという結果がでてい

る。酪農協を拠点とした酪農発展の効果としても一つ期待されるのは、小規模農家や土地なし層を取り込んだ貧困緩和への効果だが、これも一定の成果は見られるものの、

限界があるようである。

また、政策的に各地で上から作られた酪農協には不効率なものも少なくない。NDD Bの年次報告書によれば、一七〇の県レベルの連合会のうち、政府資金投入によつて経営改善が必要な連合会は約五〇にのぼるといふ。四、経済自由化の流れの中で

一九九〇年代に入つて、インドでも経済自由化が進んでいる。こうした中で、政府によつて保護・育成されてきた酪農協を取り囲む環境も大きく変化しつつある。その最大の変化は、酪農産業への私企業の参入を規制してきたライセンス制の廃止である。これによつて、ミルク業界は激しい競争に突入し、経営が立ち行かなくなつた酪農協もでてきているといふ。農協セクターとして市場競争力が比較的に強い酪農協は、こうした市場での競争激化に対し、自らも規制緩和を求めることで、生き残りを目指そうとしているようである。具体的には、酪農協への政府の介入を弱め、経営の専門性を高め、市場競争力の一層の強化を図ろうとしている。

東アジア諸国に比べて相対的に緩慢な発展を遂げてきたインドも、経済自由化の中で大きく飛躍する可能性を示し始めている。酪農は、今後も経済発展とともに、当分は需要が伸びる重要な農産物である。世界最大のミルク生産国として、輸出をにらんだ発展も期待されよう。こうした中で、酪農協の今後が、大いに注目される。(須田敏彦)